

中村 正（立命館大学産業社会学部 教授）

中村 おはようございます。中村です。よろしくお願ひします。こういうテーマで話をして、毛利さんの話では、ソーシャルという点やモラルに関するあたりと関係します。ジャスティスの変化の話もします。私は大学で臨床心理士と対人援助職者を養成するところで関わって関係もあるんですが、外で活動していますので、その経験も交えて話を



します。松原所長が冒頭で申したような経過で人間科学研究所の創設に関係してきた経過もありますのでその点からまず話をします。R-GIRO という立命館の中の大きな研究組織があって、そこの中に法と心理に関わる領域は結構長く歴史があります。今第3期になっています。法心理・司法臨床研究拠点をつくっていたんです。さらにその下に5つのプロジェクトがありました。さらに1本化して、この研究チーム全体が、今回はその中の1つの修復的司法に関するチームがやっているんですけども、全体像は総合心理学部の若林さんが代表です。あとで話があると思いますが、こういう計画で、とりあえずディシプリンごとにということではなくて、問題解決中心に（イシューオリエンテッド）動いていきながら、ディシプリンを再編すべきなのかどうなのか、そうでないのか、そのディシプリンだけではなくて包括的なインスティテューションですね、組織や制度もどうあるべきか、ということが大きなテーマになって動いてきました。私自身はそこに社会病理学・臨床社会学として関係しています。

逸脱となる問題行動を研究しています。しかしその問題行動の背景にある生きづらさとか、怒りとか、それが犯罪になったりする場合がありますので、背景事情と犯罪的行為の区別と関連をどう収めていくか、つまり解決していく仕組みがいるということでやっている分野です。少年刑務所では性犯罪者の再犯防止教育に関わっています。これは少し歴史があります。2004年にあった事件を中心に法務省が作ったプログラムが2006年度から動いています。最初からスーパーバイザーとして関係しています。

ただ、残念ながらその少年刑務所が老朽化のため廃止になるんですね。とても由緒ある刑務所なんです。少年刑務所は独特なんですね、少年だけど一般刑務所に入れると、将来のこともあるのでということで、少年層を集めてやっているところですよ。そこがなくなるのは残念だなと思っています。

全体的に犯罪者が少なくなってきたということですが、たぶん少年院も収容者が少なくなってきたんじゃないかな。ですから全体的に再編期です。再編期はさらに司法のありかたの再編にもつながると思います。関わっている領域は結構あって、全体的に加害者の処遇をどうするかが課題です。加害者臨床や法-心理臨床、それからデジスタンスというのが共通して出てきています。デジスタンスとは離脱という意味で単に犯罪をやめるというだけではなく止め続けるという意味です。例えば薬物なんかでも、一旦使わないということになったとしても、それを生涯ずっと関わってやめ続けることがどうしたら可能かということの研究していくわけです。これは協力雇用主さんと一緒になって調査をしているところです。

矯正施設での再犯防止プログラム、出たあとのデジスタンスと連続して取り組みが要ります。カウンセリングやガイダンスやリハビリテーション全体のなかに、刑罰も含めて、あるいは刑罰を回避することも含めてどう組み立てるのかという理論化も研究仲間とやっています。DV、虐待、ストーキング、ハラスメント、いじめ等に対応する法律がたくさんできてきました。そうすると多様な問題を可視化させていきます。ですから法化した後の加害者をどうするかがどの領域でも課題となります。十分に制度ができていないという意味ですし、刑罰だけでは変化や動機ができていけないという意味でもあります。最初、私はDV防止法に関わっていたんですけども、加害者をどうするかというのは法の中に書いてありますが、国に研究を義務付けただけです。研究ばかりしているんですね。私はもう30年近く、アメリカやイギリスの研究をしていて、制度もすでにあつたのでプログラム受講命令制度を治療的司法や修復的正義の観点から提案しているんです。しかしなかなか法務省は取り入れてくれないですね。

児童虐待防止法もそうです、それから高齢者虐待防止法もそうです、ストーキング行為規制法もそうだし、労働法制からくるハラスメント規制も同じです。

それからいじめ対策基本法もできたけれども、これらすべてに加害者対応について現実的にはどうするのかというのがかけています。それからさらに民事的にも問題なのは離婚に伴う暴力です。このことについて、本当はたくさんいろんなこと詰めなきゃならないんだけど、十分できていません。私はすでにいろんなことで提案はしてきたんだけど、出来てはいないんですね。更生ということに向かって、概念も含めていろいろ変化を制度化しなければならないということです。修復的正義や司法や治療というどうしても、医療的な問題も想定されるんですけども、本当に広いです。ですから回復とか、修復とかという概念も使って、心理、福祉、就労、生活等の幅広い支援がいらいます。その過程では治療的司法・正義をささえる治療的コミュニティ TC です。

実にこの30年ぐらい、法律や心理臨床や、ソーシャルワーカーも含めて多様に考えを変えなければならない概念にたくさん出会って来て、言葉が出るたびにいろいろ調べなければならなくて、調べるだけではわからないので現地に行ってみるといことで、いろんなとこに調査にでかけています。さらに最近は薬物問題対応の一環でデジスタンスの取り組みのあるハームリダクションです。ヨーロッパの流れになっています。これが何なのか、ぜひ究明したいなと思っているところです。説明できないくらいたくさん概念があって、さらに暴力の形態も実に多様なので、これらを問題化したあと、ようするに火をつけているわけです、一生懸命火をつけいるわけですね、あぶり出してきたわけです。従来、日常の中に沈んでいたものを可視化させるのです。可視化させるとなると今度は火消しをしなければならないんです。つけた火は消さなければならない。この消す仕組みが十分ないんです。これについて法律や心理や社会福祉や、何をすべきなのかという責任があります。実にたくさん暴力があります。人間が社会を作っていく以上、なかなか暴力というのはなくならないんだなとも思います。ですから暴力への対応、しかも親密な関係性における暴力や友人、同僚同士の暴力をどうしようかということを通じてシステムや臨床のあり方が進化していくのかなと思っています。

暴力についての別のプロジェクトでは異分野混交です。脳科学者、人類学者、法学者、心理学者、社会学者等いろいろです。暴力は本能的な問題ではないということで、学習されていく、社会適合の1つの形なので、生物学的なものに

還元しないで研究しようと考えています。

暴力とか、依存とか、逸脱とか、問題行動として視野に入れます。問題行動を通じて何かを表現する人たちがいて、そうしたカタチで、満たしている、ニーズがあるわけですね、ここについて考えていきます。違法な活動が多いので、そこに修復、修正をする前に規範とか責任が立ちにくい人たちがいる、それはもしかしたら障害の故であるかもしれない、ということを考えていきます。そうするとその経過のなかにロジカルにいろんなものがつながっていくと思っています。これを逸脱の背景にある人間的ニーズとして見立てていきます。

その人たちがとる「問題解決行動が問題である」ということです。これはシステム論をベースにしています。問題解決行動がより適切な形でうまくいくように支援をします。世界の脱暴力支援を調べてみますと、わかりやすいのは先ほど毛利さんが仰いましたけれども、「責任と支援」、この両方をどう追求するか。それから修復と治療と回復のプログラムをどう組み込むかです。それらを1つのシークエンスにどうつないでいけるかということが大事です。サークルとか、カンファレンスといいます。それをひとつのシステムとして組み立て、イギリスでは「サークルズ UK」というのを作っています。もともとはカナダのモデルで、CoSA といいます。Circles of Support and Accountability の略です。他にもいろいろなやり方があって、先ほどニュージーランドのファミリーグループカンファレンスも同じような系譜です。ですから実にいろんな形で世界がこの問題行動についてなんとかしたいという取り組みをたくさん始めていて、もうかなり歴史があります。あちこで調査しながら見えています。2013年に「サークルズ UK」に調査にいきました。再犯リスクが浮かび上がります。これは社会的孤立、感情的寂しさがビッグ2です。いろんな心理学的メタ分析の再犯研究もあります。そこで諸要因は分かっているので、これをどう押さえて、対応するかということが問題だろうということになってくるわけですね。そこに認知行動療法とか、いろんなアプローチが有効であれば組み合わせしていくということになっています。

わかりやすいのは、この図の真ん中にある出所者ですね、出所者に対してサークルを作って支援していくということになります。もう少しこの部分を見ると、コアメンバーという本人を置いて、ボランティアベースの黄色い部分の人たち

がいて、これらはだいたい2年ぐらい継続して支援を続けていきます。日本の保護司によく似ていますが6人でチームを組んで一人の出所者を支えるというシステムが異なります。保護観察官はそのサークルをアドバイスします。弁護士や精神科医もサークルを支援します。そのボランティアは専門的な研修を受けています。

電話相談から、つきそいサービスとか、レストランやカフェで会うこともしているようです。街で普通に暮らしながら2年間支援します。再犯の可能性が一番高い時期をサポートしています。なるべくなら保護観察所以外で会うのがよろしいということになっています。ハウジング、それから就労活動への支援ということでサークルを作って支援をしていく。だいたいイギリスで600サークルあるので、イギリスで登録されている人たちが2,500人くらいの犯罪者、出所者がいるらしくて、600サークルに伸びているんですね、というようなことに今はなっているようです。出所者の数で実働サークルは変化していくのですが。

出所者が「幸せに生きる」ことが社会の安全だし、被害者の安全にもつながるといって、社会防衛的な意識もあります。被害者支援的でもあるし、さらに社会的コントロールでもあります。これらが統合されているようです。刑事罰のあり方をめぐる争点を巻き込んでいますが、更生保護の見地から、出所者が幸せになることをめざすことこそがすべての意味での安全を確保できるというのですから、すごいことだなと思っています。そうしないと再犯のリスクのほうへと傾いていくということになるんですね。

アメリカ、韓国には出所者の登録制度もあります。イギリスも同じように、今のサークルズの仕組みの時に出てきます。しかし登録だけしていると社会コントロールが前面にできません。ソーシャル・コントロールの前に、あるいはそれと同時に登録させるだけではなく、スティグマ化も回避しつつです。出たあとのスティグマがずっとつきまとうことになることを回避します。

ただ、サークルズも支えてはいますが、登録されていくわけですね。登録されながら支えられている、こういうことです。登録というのはAccountability、説明責任を果たさなければならないのではないかという視点があるからです。しかしサポートです、幸せに生きるということがどうサポー

トされるか、1人でやって生きていくと、まだ十分ではないという判断です。これはハームリダクションの考え方につながります。管理・統制しつつ、代替薬物を与えていくというのです。注射針の使い回しによる感染症を防ぐという公衆衛生上の課題がかわります。

もちろんそう単純な話ではない社会的現実を生きています。アレキサンダーさんという人が「ラットパーク実験」をして以降の薬物依存の実験です。一番上は心理学的実験で、ケージです。このケージに入れてですね、モルヒネ入りの水と、それから普通の水、どっちをたくさん飲むかという実験をしたら、当然、ラットはすることがないのでモルヒネ入りの水をたくさん飲み始めた。ところがアレキサンダーさんは反論した。ラットはもっとナチュラルに生きているはずなので、走り回ったり、それから子どもと遊んだり、オスとメスが触れ合ったりするというパークを作るとどうなるかという実験をしたんです。そうしたら普通の水を飲みだしたということなんですね。だから依存物質に支配され、はまっていくのは社会環境によるということの実験なのです。社会環境がパークようになっていけば、やっぱりもとのケージ設定が不自然だと批判をしたんですね。

ところがこれにも批判があります。つまり社会環境としてパークはあり得ないという点です。自然はもっと弱肉強食なので樂園はありえないということです。人間でも同じです。自然なかたちでの社会環境にはいろんな欲望の装置が埋め込まれています。ヒューマンパークには誘惑がたくさんあります。葛藤もあります。でするので放っておくとうこういう環境が用意されています。象徴的にまとめると、「のむ、うつ、かう」のパークとなります。これは男性から見た欲望の体系なので、女性からみた欲望の体系は別の言い方になるのでしょうか。「のむ・うつ・かう」はしかし全部合法的なことですよ。最近カジノ法案通ってしまいましたのでどうなるかさらに心配です。全体的に合法的なことです。これも含めて人間生活なんですね。管理された樂園に生きるわけにはいかないので、管理された樂園って、たぶん息苦しいと思います。

こういう場所へと出所者は戻ってくるわけです。こういうなかに生きながら、どうやってセルフコントロールするかということがテーマです。このコントロールを支えるということ。そのコントロールを支えるには、いろんな生

き方がありますがけれども、サポートと、それからモニターでしょうか。それを社会的コントロールという管理と監視の視点ではなく、説明と責任という本人モードでずっとやめ続けるために、その過程を把握するためのメンテナンスのコストこそが大事で、ここに向かってどう行けるかということなんです。デジスタンス（離脱しつづけること）を支えるという意味です。

2016年にニュージーランドに行く機会がありました。これはマオリコートなんです。ちょっと見にくくて申しわけないんですが、マオリの裁判長がタトゥーを顔にいれている写真です。ニュージーランド治療的司法学会で出会いました。ニュージーランドはマオリの人口が二十数パーセントなので、マオリのやり方で司法も機能しています。近代的な司法の仕組みに、刑罰の仕組みにマオリの伝統文化を接ぎ木したのです。どうやって罪と罰を統合していくのかという時に、マオリの伝統的な文化を活用しようということになったわけですね。

これは修復的司法の源泉でもあります。修復というのがアボリジニやマオリの文化を尊重するかたちで統合されていきます。オーストラリアもです。また形の異なるタイプの問題解決の様式を持っている文化と、近代的な処罰中心の文化と接合するかという大きな課題があった時に工夫されたものです。

ニュージーランドの文化では鼻と鼻をくっつけることがとても大事な儀式になるんですね。パワーを持っている人から被告に鼻と鼻をくっつけて、二度とやるなよと、こういうふうに伝えるわけです。それが裁判です。ものすごくユニークなんです。ある種のコミュニティに支えられているわけです。コミュニティに支えられているようなものなかでの治療的手法や修復的手法という文化がそこにはできていますので、支えあっているんです。これは先ほどのサークルの発想ですよ、サポートする、しかし、ちゃんとスピリチュアルなものも含めて、伝統文化も含めています。

モニターしているのはあなたの中の内なる声と応答しないとだめでしょうね、という形で、モラルとジャスティスがセットになっていると感じました。そこに対して伝統文化というスピリチュアルなものが刺青を通じて伝わっているわけです。鼻を鼻をくっつけるというのは当然儀式ですよ。鼻と鼻が接触しているわけですよ、そういうなかで見えてくるものがとてもユニークだった

ので、サークルの背景かなと思って紹介して起きます。日本にこれらを輸入してきました。私は「男親塾」と称して、DVや虐待した親たちに対して、中には出所者もいます。傷害で捕まり、薬物で捕まり等していた人もいます。最近では乳児揺さぶり症候群と呼ばれる加害親たちもきます。不注意な事故であるので過失責任を問うのです。その人たちに対してかなりのナラティブというのを採取しながら、どうやって怒りの表現とか感情表出とか、責任を語る言葉が出てくるかということ、一応調査しながらスーパーバイズをやっています。

家庭裁判所によって子どもが離されますので、これは2年間なんです。2年ごとに措置の変更をしています。2年かけてこういうグループワークをしながら、先ほどのファミリーカンファレンスで、責任とか、あと自分がやったことの反省とか、反省は外部から圧力の場合なので、内側からやったことの振り返りということで支えあってやっています。マンツーマンでは難しいのでグループでやっていくのがいいかなと思っています。先ほどのTCもコミュニティなので、グループでやっています。

社会的孤立と感情的寂しさという再犯要因に対応させてレジスタンスを得ていきます。その際に重要なのが「時間と空間と仲間」の三つの「あいだ」づくりです。それをどう作っていくかということが、社会的統合や包摂という場合の具体例として要請されます。ヒューマンパークは誘惑の多い社会だし、個人責任も問われます。こうした社会のなかで、いかにしてレジスタンスは可能か、1人だけだと生きられないので、先ほどらしいの社会的孤立と感情的苦痛の問題がありますので、これをどう解決していけるかということで3つの「あいだ」を体系化していきます。そうしたレジスタンス支援を地域でつくることにしています。これはレジスタンスのネットワークです。対応していくのはリスクではなくて人間的ニーズの方なんです。出所者の人間的ニーズのほうに対応していくのです。刑務所は毛利さんの言っているとおり犯罪をしない要因に対応していくわけですね。社会内処遇としては非犯罪的要因に対応していくのです。グッドライフモデル Good Lives Model といいます。グッドライフモデルは今日のスピーカー4人のレジュメに全部出てきますので、1つの大きなテーマかなと思っています。

日本でもこうした取り組みをしたくて、いろんな資源とかにつなごうと思っ



ています。個別にはデジスタンスにつながるような資源が整備されてきています。法化対象にあわせて、個別には、縦割りですがいろいろあります。子ども虐待の親たちには私自身が大阪一円の児童相談所と連携してやってはいます。別のチームが母親グループもやっています。薬物依存の人たちに対してダイバージョンセンターを作ってやっている弁護士さんとか、当事者組織の「ダルク」があります。それから触法障害者の方のやり直し支援には地域生活定着という概念でセンターが各地にあります。もともと本当は刑務所にいるべきではない人が刑務所にいるとすると、そのチャンネルを作っていくことになります。社会的入所と呼んでいる事態です。精神病院、刑務所等のアサイラム（生活管理型の入所施設）ではなく、日常生活をしながら回復しつつ、デジスタンスに向かうのです。

毛利さんたちは性犯罪のデジスタンスで矯正施設ではなく社会の中で再犯しないような取り組みをしています。別のプロジェクトで一緒になっている大阪大学の藤岡先生がリーダーです。性犯罪や性問題行動の人向けの民間組織「もふもふネット」で活発です。それから薬物依存への対応で先ほどあげた人たちです。こういう人たちと専門家同士がつながることも含めて一緒にやっています。私はDV、虐待に対応しています。これらに共通しているのは嗜癖と嗜虐という概念で見える問題行動の特質です。嗜癖的、嗜虐的行動なので、長期に反復を繰り返している行動です。その人の習慣的な問題解決行動になっています。暴力・虐待もそうです。暴力を加えて彼が感じる問題を解決しようとしています。彼の思うようにならない現実を暴力で解決することで益を感じます。嗜虐性・嗜癖性が強いということです。これらはみな共通しているので一緒にやっています。違法性が強い領域もあります。それから違法ではない領域もあります。まだ十分犯罪化されていない、あるいはもっと合法的にギャンブルがある。連続的ですよ。

暴力、虐待、体罰、しつけは連続的です。日本社会はここが分節化されいません。依存症をもたらすような文化にあふれているので嗜癖性、暴力が分節化されていないので問題解決行動や人間関係のなかに入り込む嗜虐性が充進するような社会です。そのなかに犯罪や逸脱が組み込まれています。特異な存在の人だけがはまるものではありません。何かの機会のつかみそこね、あるいは別の

機会で異なる経路に入ってしまったと考えていきます。その経路の異なりところに Good Lives Model でいうところの Good を組織していくのです。たとえば出所者たちの攻撃性のコントロールにボクシングを使ってみたらどうかということで、結構大きな BBS 組織で余暇としてやっています。ここでフィールドワークしてまして、調査の取り組みをしています。結構、重要に機能しています。

あと、プリズンシアターが世界の刑務所にある場合があります。日本でもやりたいなと思っているんです。自分たちの人生をドラマにしていく、共通でシナリオを書くというところを作りたいなと思います。さらに、このパワー系のコントロール、仕事があるので仕事のためにこういう機械系の免許取得促進もいいなと思っています。ガンダム系です。

人型ロボットなんですね。2017 年から法律が変わります。18 歳や 19 歳で今空白だったことに対して免許が新設されます。新しい準中型免許と言います。免許を取ると仕事ができる、仕事ができたらパワー感がでる、機械系が好きな出所者向きです。デジスタンスと仕事や余暇の関係がみえてきます。

あと、動物を活用したコミュニケーション練習です。イヌや馬の調教をしながら動物に人間がトレーニングされます。動物をトレーニングすることを通じて、自分がトレーニングされているんですね。相互作用が成り立つんです。自分では御せないものを御していく、ということですね。動物から学ぶ自分があるわけですね。この相互作用はものすごく大事な要素です。ダイビングや登山のスポーツもいいのでしょうか。自然に包み込まれる、要するに万能感、全能感を放棄するということです。

Good を配置していくのです。こんなことで社会資源がいっぱいつくといいなと思います。働くことも大事です。これは知的障がい者のためのソーシャルファームに見学に行ったときのものです。これをデジスタンスの人たち向けにやりたいなと思っています。

そして社会臨床につなげていきます。デジスタンスを可能にする社会統治のことです。ヨーロッパもアメリカも社会統治のカタチを変えてきたんです。治療的司法・正義、修復的正義、ハームリダクション、プログラム受講命令制度そしてデジスタンスは全部つながっています。日本も何らかの形で定着してく

ると思います。その際、包摂とか統合という、社会にとっては支配的な、社会復帰の物語を前提に本日は話をしました。しかし、さらに聞きたいことは「復帰したいと思う社会なのか」ということなんです。自分たちを犯罪に追いやった（と思っている面もある）社会にもう1回戻ってこいということになります。ですからこの整合性です。ここがまだ十分練られていないと思います。やっぱり統合を強いるだけということになります。「復帰したいと思う社会なのか」の問いこそが社会臨床的な中心課題です。彼ら／彼女らが幸せに生きていけるかどうかということから社会が反省をしながら、どういうふうに相互作用が生まれるかということで、レジスタンスのためのガバナビリティのあり方を研究していきます。長くなりましたが、以上です。（拍手）